

77 ジャポニスムと美術商・林忠正（2021年9月2日）

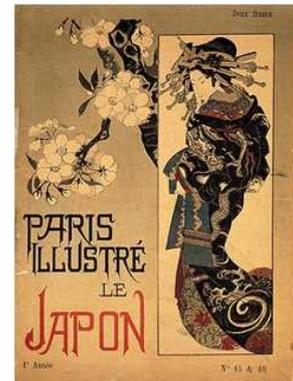
19世紀後半から20世紀初めにヨーロッパではジャポニスムが流行しました。日本美術は多くの芸術家のインスピレーションの源となり、モネやゴッホなど日本の浮世絵や陶器に影響を受けた画家達がありました。このブームの陰には、実はある一人の日本人の活躍がありました。それは、美術商の林忠正（1853-1906）です。

1878年のパリ万国博覧会に「起立工商会社」という貿易商社が出品することになり、忠正は通訳として渡仏しました。日本美術ブームを目の当たりにした忠正は、1884年にパリでギャラリーを開きました。忠正は、流暢なフランス語を駆使し、名高い芸術家の中でジャポニザンと言われた日本美術愛好家たちと幅広く交流し、浮世絵を始めとする日本美術の普及に努めました。



HAYASHI Tadamasu / 林忠正

忠正は、絵入り雑誌「パリ・イリュストレ（Paris illustré）」誌の日本特集号（1886年5月）で、日本人として初めてフランス語で日本を紹介する記事を書きました。忠正は、日本の歴史、風土、文化や芸術など幅広い分野について正しい情報を伝えようと努めました。ゴッホが、この雑誌の表紙に描かれた溪斎英泉の浮世絵を模した「花魁」を描いたことから、当時活躍していた芸術家たちに影響を与えた雑誌であったことがわかります



パリに長く暮らし、博覧会の運営にも知見があった忠正は、日本政府の要人から推薦されて、1900年のパリ万国博覧会で日本の代表である事務官長を務めました。当時の帝国博物館が編纂した「日本美術史」の仏訳がフランス国立図書館に残されており、仏訳版には忠正が書いた「読者へのあいさつ」が付されています。これは初めて古代から江戸時代までの日本美術を包括的にフランス語で紹介した本で、豊富な美術品の写真を用いた500頁に及ぶ大作です。

忠正は、フランス人に日本美術を紹介する傍らで、同時代の西洋美術をコレクションしました。忠正には、コレクションを日本に持ち帰って、近代の西洋美術を紹介する美術館を開設するという夢がありました。しかし、忠正は、日本に帰国した翌年の1906年、残念ながら夢を果たせないまま病のため亡くなりました。

## パリの日本大使館員が見つけたフランスの中の日本

日本美術に対する関心が高まっていたときに、忠正がフランスの芸術家たちに日本美術に関する幅広い知識を伝えたことで、日本文化がフランスで知られるようになりました。忠正は、ジャポニズムのブームの影の立役者と言えます。